「教育方法の実際」の試論
～戦後世代の「戦時」体験教育の道筋―(2) ：井上ひさし原作『父と暮らせば』の教室公演－歴史認識形成のプロセスを考える～

滝澤　民夫

はじめに

数年来、教職科目「教職論・教師論」「公民科教育法」「地歴科教育法」「社会科教育法」の授業で、学生の現代認識・歴史認識の新たな獲得の道筋を検討している(1)。そのなかで、この３年間、教室での井上ひさし原作『父と暮らせば』の公演を実施した(2)。本稿では、受講生による同時代史研究(3)とあわせて、戦争体験のない世代が戦時体験をどのように学習し、教材化し、さらに戦時体験から遠い世代に考えさせ、記憶文化(4)として継承してゆくのか、その道筋の一方法を提起する。

体験の記憶の継承は内面化の作業をともなってはじめて文化として定着し、継承される内実を持つ。それを私は記憶文化と定義してきた。「記憶の内面化」の過程における「記憶の継承」としての歴史教育とそこでの歴史認識の形成＝考え・学びあう学習行為こそ、成田龍一のいう「新たな関係性や認識、記述が模索されること」(5)の基礎でもある。

歴史学では成田につづき赤澤史朗が、「「戦争体験」の回想と運動は、戦後日本の精神変革を支える原点として存在してきた」としたうえで、その「体験」の再検討を抜きに世代間継承はないとしている(6)。また、吉見義明が戦後日本の「アジア太平洋戦争の体験と記憶」の変遷を通観して、戦争体験世代が 90 歳代になった現在、「日本が何をしたかを具体的に認識し、記憶することが求められている」としている(7)。さらに、山田朗が「兵士たちの戦場」の体験と記憶の歴史化を提唱している(8)。これに対して、歴史教育学を提唱している今野日出晴は「軍隊体験と戦場体験」・「終わらない戦争」の授業実践から教科書を念頭にした歴史叙述の過程で「等身大の兵士像」と「被爆者の戦後史」を扱い、「固有名詞をもった一人一人の人間」をどのように描くかを模索している(9)。

こうした動向を踏まえ、ここでは井上ひさし原作『父と暮らせば』の教室公演を通して、青年の歴史認識形成のプロセスを考え、戦後世代の「戦時」体験教育の道筋を提起する。

１．戦争体験のない世代が戦時体験をどう教えてゆくのか

前掲拙論「「教育方法の実際」の試論(1)」では、事例①として、受講生の「満州事変」の模擬授業、事例②として、沖縄の現在・過去・未来の授業を紹介した。ここでは事例③として、教室での井上ひさし原作『父と暮らせば』の上演(2015 年度)を素材に、「戦争体験のない世代が戦時体験をどう教えてゆくのか」という課題を検討する。『父と暮らせば』の教室公演は以下のように実施してきた。

2013 年度　駿河台大　　社会科・公民科教育法Ⅰ
2014 年度　駿河台大　　社会科・公民科教育法Ⅰ、教師論・教職論
　　大東文化大　教科教育法 地理歴史

2015 年度春学期は担当科目(５科目)のうち４科目で実施した。そのうち、駿河台大での社会科・公民科教育法Ⅰの実施内容は次のとおりである。

社会科・公民科教育法Ⅰ(駿河台大、２単位)　実施内容　　2015 年春学期

月　日	回数	講義内容
４／14	第１回	講義をはじめるにあたって 「2014年の冬～2015年の春」の新聞記事から
４／21	第２回	模擬授業　昨年度履修生　中学　地理「九州地方」(50 分) [パワーポイント画像と班学習]
４／28	第３回	中学社会科と高校公民科教育の現状と課題 ―「2014年の冬～2015の春」を考える―（つづき）
５／ ６	第４回	中学社会科と高校公民科教育の現状と歴史的変遷 公民科の歩み②　戦前期～戦後期
５／13	第５回	中学社会科と高校公民科の歴史的変遷:戦後期(つづき)
５／20	第６回	日本国憲法と女性の権利
５／27	第７回	高度経済成長とエネルギー革命
６／ ３	第８回	高度経済成長とエネルギー革命(つづき)
６／10	第９回	戦後史の起点から考える 渡辺 浩(ゆたか) 『15 歳のナガサキ原爆』を通して
６／17	第10回	『父と暮らせば』鑑賞(演出：三枝 竜,出演：小林幸雄/中川智美)
６／24	第11回	公害と環境問題　原点としての四日市公害
７／ １	第12回	全国水平社と部落解放運動 教材研究①　学習指導案の作成
７／ ８	第13回	全国水平社と部落解放運動(つづき) 教材研究②　学習指導案の検討
７／15	第14回	模擬授業　テーマ：人権と部落差別問題 中学　公民「人権と共生社会」２人（各15分） 高校　現代社会「基本的人権の保障」２人（各15分）
７／22	第15回	部落差別の歴史を考える(補足講義)

早稲田大：社会科教育法２Ⅰ(２単位)・大東文化大：教科教育法 地理歴史(４単位、通年)・駿河台大：教職論・教師論(２単位)につては略。

実施の際の教室公演参観者数は次のとおりである。

2015.6.13. 早稲田大　　社会科教育法２Ⅰ
　　実受講者 35、参観 21、欠席 9、公欠 5、読書 3、参加率 70(80)％

2015.7.16. 大東文化大　教科教育法 地理歴史
　　実受講者 14、参観 10(9)、欠席 1、遅刻 3、読書 4、参加率 71(93)％

2015.6.17. 駿河台大　　社会科・公民科教育法Ⅰ
　　実受講者 25、参観 17、欠席 7、公欠 1、読書 0、参加率 71％
　　教職論・教師論
　　実受講者 55、参観 37、欠席 17、入院 1、読書 1、参加率 69(70)％

合計受講者 129、参観 85、欠席 34、公欠等 10、読書 7、参加率 70(79)％

半期の平均出席率　早稲田大　社会科教育法(15 回)　　82％
　　大東文化大　地理歴史(14 回)　　91％

駿河台大	公民科教育法(15 回)	79%
	教職論・教師論(15 回)	85%

『父と暮らせば』鑑賞の授業と平均出席率の比較

早稲田大	社会科教育法	82%	→	70(80)%
大東文化大	地理歴史	91%	→	71(93)%
駿河台大	公民科教育法	79%	→	71%
	教職論・教師論	85%	→	69(70)%

のべ４回の教室公演の参加者は受講者の約 70%で、平均出席率 84%よりも 14%低かった。これは、①問題関心や問題意識の差、②「強制」への拒否感ともいえよう。

早稲田大では、事前課題の提出者 31、提出率 89%だった。これは講義ではない(点数に直結しない)特設授業を軽視する意識で、この落差はこうしたテーマ設定上での課題といえる。しかし、感想文などを見る限り、参観者の問題関心は多岐にわたり、戦時体験の記憶化への道筋を考えるうえでは参考になる。

この教室での朗読劇鑑賞の実践は駿河台大での「社会科・公民科教育法」で倫理分野「青年期の課題」を扱った際の、シナリオ講読の授業から発展させたものである。この授業では、以下の作品を教材とした。

2010 年度　山田洋次脚本『幸福の黄色いハンカチ』(1977 年作品)

2011 年度　山田太一脚本『男たちの旅路』(「シルバーシート」)(1977 年作品)

2012 年度　新藤兼人脚本『一枚のハガキ』(2011 年作品)

受講生によるシナリオ講読・朗読への反応は良かったのだが、それだけではどうしても一方的な提起で終わる。そこで、「戦時体験」を疑似体験する手法として、演劇の教室公演を実践してみた。次に演じる側、伝える側の問題意識を紹介する。

２．戦時体験をどう伝えると記憶化されるのか

劇団こまつ座を主宰した井上ひさし『父と暮らせば』(1994 年作品,演出鵜山仁)は、ヒロシマに投下された原爆で父親が眼前で焼死した３年後の娘の「生き残ってしまった被爆者」の苦悶と再生をテーマとしている。埼玉県川口市にある劇団キンダースペースの演出家三枝竜(30 代)と、元埼玉県公立中学校社会科教員小林幸雄(60 代)、広島市生まれの女優中川智美(20 代)が演じた朗読劇は狭い空間である教室での講演には適していると思われた。そこで、教室での朗読劇鑑賞を試みた。ボランティアでの教室公演に際して、演出者・出演者は当日配布した資料に寄せて次のような主旨のメッセージを寄せている。

三枝 竜（演出）[2013/2014/2015]

・人に「伝える」というのは、いかに難しいことか。心にある言葉にならない思いを、誰かに伝えられるかもしれない、それに挑戦し続けるのが演劇ではないかと思う。

・映画を教室で上映会をして見て貰えば、朗読や演劇でなくてもいいのか。生身の人間が体現することでしか伝えられないものがあるゆえ、今回の作品を通じて、伝えるということがどんなものか、皆さんに改めて考えもらえる材料になれたらと思う。

中川智美[2014/2015]

・広島出身の私としては、この作品は特別で、間近で見ていた原爆ドームや街並みを思い出すと、これがただの井上ひさしが描いたフィクションでなく、形は少し違えど確

かに被爆を経験した人びとのノンフィクションなのだと思えてならない。

・彼らのように、親を想い、子を想い、好きな人を想い、友を想い、そして自分を想って欲しく、この作品が皆様の何かの糧になれば幸いだ。

・今春、数年ぶりに実家に帰って父と話し、街を歩いた。平和記念公園や周辺に幾つかある慰霊碑に手を合わせ、被爆者の方々のお話を聞いてきた。比治山の風のように通り過ぎてしまうのは勿体ないので、小さいものでも良いから、貴方の中に何かを残すことが出来ますように…と祈りながら、美津江になりたい。

小林幸雄[2013/2014/2015]

・竹造になるのは、美津江に「おとったん、こわーい！」と呼びかけられた時で、父としての自覚が生まれる。

・作品に対した時の思いは、被爆した戦争末の広島と、戦争直後の広島の現実（1948 年は私の生年）に向かうが、同時に日本文学のひとつの伝統と対面しているようだ。先年没した丸谷才一（集英社新書『書物の達人 丸谷才一』発刊）は、この作品は『太平記』までの伝統の復活(死者たちの亡霊の活躍)にあるとしている。

・竹造は言う。「…やい、鬼。これは人間の身体に突き刺さっとったガラスの破片ぞ。あの爆風がヒロシマ中のありとあらゆる窓ガラスを木っ端微塵に吹っ飛ばし、人間の身体を、(涙声になっている)針ネズミのようにしくさったんじゃ…」

それに対し、美津江(いつの間にか左の二の腕を押さえている）「やめて！」。

ガラスの破片への想像は、長田新編『原爆の子―広島の少年少女のうったえ』（岩波文庫）の、小学校 5 年生（当時満 5 歳）の若狭育子が書いた以下の部分が手がかりになる。

「…お母さんを見ると、こしから下が血だらけです。北側の窓からとんできたガラスのため、お母さんのせ中には、大きなガラスがつきささったままです。そのきず口は、大きくふくれて、…長さ 15 センチメートル、深さ 5 センチメートルくらいで、血がどんどん出ています。お父さんはきゃあきゃあいわれるお母さんのせ中のガラスをぬきとり、ヨードチンキをビンごとぶっかけて、しょうどくされました。…」

・伝えることが俳優の仕事の一端だ。

一方、初演以来第 110 回公演を手がけてきた演出家の鵜山仁は、「死者の目線で人間の存在を考える」(『*the* 座』84 号、2015.5.17.)において、次のような趣旨を述べている。

・死者の声で語られる作品である。

・被爆者たちの手記からの言葉、作者井上ひさしの思い、代々の主人公たちの声、観客のエコー、背後にある多くの死者の声を伝える。

・大勢の死者を共演者として迎え、それに力していく。

・論理だけではなく、表情や声を通してライブで表現していく、それこそが演劇の醍醐味だし、ライブの記憶というのはもしかしたらデジタルの記憶媒体以上に長続きして、蓄積されていく。

・人の記憶に残る“音”を発見することで、この芝居を再創造し…そこから人間の核心に迫る何かが現れるのではないか。

この 4 人の演出者・出演者の問題意識を整理すると以下のようになる。

・過去の出来事の記憶には生身の人間の体現でしか伝えられないものがある。(三枝)

・身近にあった原爆ドームや街並みを思い出すと、形は違っても確かに経験した人びとのノンフィクションだ。(中川)
・小さいものでも良いから、参観者のなかに何かを残したいと祈りながら演じる。(中川)
・丸谷才一によれば、この作品は『太平記』以来の死者たちの亡霊の復活である。(小林)
・戦後小学校５年生（被爆当時満５歳）の若狭育子が書いた、傷ついた母親を目の当たりにした体験の記憶を伝えたい。(小林)
・大勢の死者を共演者として。(鵜山)
・ライブの記憶はデジタルの記憶媒体以上に長続きし、蓄積されていく。(鵜山)
・人の記憶に残る“音”を発見して芝居を再創造することで、人間の核心に迫る何かが現れる。(鵜山)

そこで次のような仮説を考えてみた。

［仮説］　戦時体験や震災体験など、歴史事象化した出来事の記憶化は、教育現場においては、伝えようとする者による働きかけ・授業・演劇などの行動・発信を通し、より鮮明な出来事の再来として、受け手による何等かの主体的な内面化の作業を経て、次の世代に継承されるのではないか。その際の一手法としての演劇は演じる人間の「声や表情」を媒介として、受け手の内面に直接働きかける作用がある。伝えられた記憶はそうした過程を経て内実を持った記憶として次の世代へ継承され、記憶文化となる。たとえば、『父と暮らせば』の教室公演では、死んでしまった(殺されてしまった)人びとの人生を瞬時に断ち切られた怨念と、生き残った人びとの苦悩とを現代に生きる人びとに伝えたいという思いの共鳴のなかで、さまざまな思いは増幅され、死者と生者の声の協奏として新たに記憶化され、演じ手と観手の双方に記憶文化として伝承されてゆくのではないか。その場合、歴史教育における演劇などによる手法の長所や問題点、演じ手の「声や表情」と観手との関係性についても整理する必要がある。

３．「参観者の感想」の分析と特徴

次に演劇的手法による歴史事象の内面化の手がかりに、参観者の感想の一部を分析してみた。参観 85、読書 7 のうち、大東文化大 4、駿河台大 21、早稲田大 15、計 40(参観 37、読書 2、不参観 1)人の感想文(レポートの一部)を分析した。参観者の 44%、読書者の 30%、全受講者の 31%である。これらにはおおよそ次のような主張が見られる[10]。

ａ：戦争を知らない世代だが、今度は自分から発信していきたい。
ｂ：戦争を知らない世代だが、生き残った人の気持や未来が印象に残った。
ｃ：私達の声で伝えることが、教師の質を上げる。
ｄ：広島の平和資料館の写真を思い出した。
ｅ：原爆投下はしょうがないを否定している作品だ。
ｆ：日本はアジア諸国への加害者であり、敗戦で得た平和への想いを受け継ぎたい。
ｇ：生き残った人の心に焼き印が押されたことを、世界に訴えていく必要がある。
ｈ：演じ手の空気感やしゃべり方から伝わるものがあり、他の問題の劇化も観たい。
ｉ：平和な時代に生れたが、「話をいじってはいけない」は大切で、正確に伝えるのが教員の仕事だ。

ｊ：原爆投下は正統化できないが、戦争を終わらせたかったのではないか。
ｋ：娘には生きていくことへの罪悪感がある。原爆は生き残った者の運命と考え方まで変えた。
ｌ：広島の平和資料館に行った。生き残った人[のその後]を初めて知った。
ｍ：当時の会話を目の前で聞いているようだ。
ｎ：平和をもたらした死者への敬意を持つべきだ。
ｏ：親の温かさが伝わってきた。被爆を世界中に訴えることが重要である。
ｐ：大切な人の死のトラウマの克服がテーマで、2011 年 3 月 11 日も同じだ。
ｑ：死者への生き残った者の罪悪感と、死者からの生き残った者への激励。
ｒ：今の日本は戦争をしようとしている、という危惧。
ｓ：朗読劇は目の見えない人にも伝わる。伝えることの重要性。
ｔ：憲法９条改正はどうでもいいと思っていたことを反省した。
ｕ：安倍晋三首相はこの劇を観たのか。演劇には伝えてゆく使命があると気づいた。
ｖ：沖縄出身者だが、沖縄戦や基地問題への本土との落差がある。戦争はいらない。
ｗ：特別参加しているような気分で、心に話しかけられているようだ。
ｘ：被爆の悲惨さを感じた。今の日本の政治から戦争への不安がある。
ｙ：祖父は被爆者だった。憲法９条を改正してはならない。世界へ伝えることが私たちの役目だ。
イ：目の前のものを自分の目で捉えることで得るものがある。
ロ：朝日新聞の記事(2015.3.12.)にある宮城県の遺族の声と重なった。生きることの意味を考えた。
ハ:「ありがとありました」が父から娘へ移ることで、ヒロインは原爆と自分に向き合う。
ニ：死者への感謝の気持ちを抱いた。靖国神社に参拝し、遊就館を見学した。
ホ：祖父は被爆者だったが、何も語らずに亡くなった。何故語らなかったのか。語らないことにも意味がある。そのことを生徒と共に考えたい。
ヘ:高校時代に平和学習で『夕凪の街 桜の国』を観たが、被爆者の苦悩が共通していた。被爆を忘れられないことの傷である。
ト：演じることは心に響く。
チ：日常会話から物事の核心に向かっていた。劇としては直接的すぎるので、ちょっと違う角度からの作品で戦争や平和を考えさせたい。
リ：私は感動したが誰もが感動するとは限らないので、どういう授業を作るかを目指したい。
ヌ：歴史を後世に伝えるべきだが、教育者と当事者の思いは一致しないこともある。
ル：戦争を知らない世代だが、戦争を知り伝えることが大切だ。
ヲ：体験者への視点の欠落を自覚した。当事者の重層性の大切さを学生に示して一緒に考えることが重要だ。
ワ:演劇は人間の感情が込められた伝達手段だ。他のテーマでも心に入る方法を考えていきたい。
カ：戦争を経験してないが、何度も問いただすことが必要である。
ヨ：今の日本政府を見ていると将来の日本が不安である。教師として生徒に何を伝える

か、真剣に考えなくてはならない。

眼前で演じられた２人の役者の朗読劇の感想を大別すると次のようになる。

・戦争を知らない世代だが(5)　　ａ、ｂ、ｉ、ル、カ
・現政府を見ていると将来の日本が不安(7)　　ｆ、ｒ、ｔ、ｕ、ｖ、ｘ、ヨ
・祖父が被爆している(2)　　ｙ、ホ
・生き残った人の東日本大震災との共通性(2)　　ｐ、ロ、
・被爆の事実を世界に発信する必要(3)　　ｇ、ｏ、ｙ
・生き残った当事者の苦悩に気づいた(6)　　ｂ、ｋ、ｌ、ｑ、ヘ、ヲ
・死者への感謝が必要(2)　　ｎ、ニ
・広島の平和資料館を思い出した(2)　　ｄ、ｌ
・原爆投下はしょうがないは否定しないが(2)　　ｅ、ｊ
・演劇の会話の伝達性(10)　　ｈ、ｍ、ｓ、ｕ、ｗ、イ、ハ、ト、チ、ワ
・他の問題でも演劇による伝達をしてみたい(2)　　ｈ、ワ
・当事者の思いと歴史教育(6)　　ホ、ヘ、チ、リ、ヌ、ヲ
・自分から発信していきたい(6)　　ａ、ｃ、ｆ、ｙ、ル、ヨ

当然のことだが、受講者中の参観者の現状認識や現状への危機感が、公演の受け止め方に反映している。以下、いくつか特徴あげてみる。

① ３大学とも、戦争を知らない世代だが、知って伝えたいとする自覚が芽生えてきている者が多数いる。
② ３大学とも、被爆者と東日本大震災の被災者とを重ね合わせて考えている者が多い。
③ 演劇的手法は心に直接訴えるとする感想が多いが、これは二方向に分かれる。
　１．死者への感謝をもつべき　　靖国神社参拝の肯定、『永遠の０』への共感
　２．他の問題でも演劇による伝達をしてみたい　　演劇的手法の可能性の模索
④ 生き残った被爆者の苦悩への理解から、歴史教育のあり方をより深く考えている。
　早大生に多く見られる。

このように見てゆくと、①と②は予測されたが、③と④は新たな反応である。

③の「心に直接訴える」演劇は、「日本はアジア諸国への加害者」でもあるという視点を持つか否かで、「死者への感謝をもつべき」と、「他の問題でも演劇による伝達をしてみたい」に分かれる。なぜ『父と暮らせば』で『永遠の０』（百田尚樹）ではないのか(第 11 回研中等社会科実践研究会[2015.7.11.]での加藤公明氏の質問)だが、井上ひさしの『父と暮らせば』には「被害者意識からではなく、世界五十四億の人間の一人として」（「前口上」）被爆者の声を伝えたいとする姿勢がある。それで私はこの３年間教材として活用している。

④の歴史教育での被爆者の扱い方を巡る論議は、被爆者でも体験を語らない、語れない、語る、伝えるなど、重層的に分かれていることを踏まえて、個々の体験や記憶の細部にまでこだわって、その事実経過と背景を生徒とともに考えてゆきたいとする方法論が提起されている。

４．2014 年度の駿河台大・大東文化大での感想の分析と特徴

2014 年度の駿河台大・大東文化大での感想の大要は次の４点に整理できる。

① 劇的手法で劇で伝えることと伝わること

・ことばが悲惨さを伝えることのすごさ
・方言で伝えることの迫力
・戦争を経験していない人が戦争を経験していない人に戦争の事実を伝える
　たとえば、沖縄のこと、そして発信すること
・授業化すれば、他の人の感想と共有・交流できる
・武器を持たないことを世界に働きかけたい
・父と娘の葛藤、人びとの原爆との向き合い方を考えさせられた
・知りたくない悲劇への感情移入へ
・道具ではなく言葉の重み、ことばでは言い表せない気持ちにさせてもらった

② 思考の内実としての被爆者の歴史とその継承に関して分かったことと考えたこと

・普通に生きることの意味
・残された人、幸せを奪われた人びとのこと
・目には見えない被害者、心の問題、悩み
・生き残っての大変さ
・原爆のトラウマ、精神的な爪痕
・身近な人が亡くなる悲しみ

③ 演劇という手法の導入と参観授業の意味は、記憶の掘り起こし、呼び覚ましにある。

・未経験者が未経験者に伝える
・演じ手と観手との記憶空間の共有は感想を出し合うことで可能になり、討論ができればさらに拡がる
・人の気持ちと向き合うことを疑似体験する
・ ことばの力は劇への感情移入をもたらし、ことばで言い表せない気持ちを醸成する

④ 歴史的事実の学習と思考の内実は、記憶の継承と反芻と新たな伝達をもたらす

・普通に生きること(：平和)の意味を考える
・残された人、幸せを奪われた人の存在への気づき
・目に見えない被害者と心の問題、悩み、精神的な爪跡、トラウマへの気づき
・原爆の怖さの継承、武器を使わないという(希いの)発信

これらの感想からも、戦後世代が戦時体験の記憶とその継承をする際に、教室での朗読劇の鑑賞から多様な啓発を受けていることがわかる。

５．まとめと課題－戦時体験の記憶とその継承の道筋－

以上のように、教科教育法や歴史教育などの授業で、戦時体験の記憶文化への結実を目指して、戦時体験の記憶とその継承の道筋を明らかにする場合に、朗読劇の教室公演は効果ある手方法の一つであり、演劇表現は一定の役割を果たすといえる。長年にわたる広島県立舟入高校演劇部の創造活動などもその一例である[(11)]。

「「教育方法の実際」の試論(1)」において私は、①受講生相互の共有化のなかでの学びの自覚化、②授業者と受講生相互の学びの共有化の重要性を論じたしたうえで、③受講生が主

体的に参画する取り組みの多様性と授業改革の可能性について提起した。

その延長で本稿では、戦争体験のない世代が戦時体験をどのように学習し、教材化し、さらに戦時体験から遠い世代に考えさせ、記憶文化として継承してゆくのか、その道筋の一方法として、教室での井上ひさし原作『父と暮らせば』の朗読劇公演への受講生の感想を分析し、その特徴を考察した。

こうした方法の実践における注意点としては、次のことを重視する必要がある。

① 教える側の働きかけ：素材の発掘、開発、教材化

② 学ぶ側の主体性の確立：今回の場合、参観率 70%の壁をどう越えるのか

③ 学ぶ側の学習の蓄積：学習と事実認識から問題点の考察へ

④ 学び合いと発表の場の設定：受講者の相互啓発と各人の発信方法の模索

今回の取り組みに対しては、「「記憶」とは果たして誰の記憶なのか、選択的な記憶のあり方をどのように織り込んでいくのか」、「虚構としての演劇が歴史教育の方法として妥当なのか」(12)との指摘もいただいた。

前者に関してはあえて「戦争体験」ではなく「戦時体験」として体験の幅を広げてきた。もちろん「歴史的事象」の「記憶」についてはその中身の厳密な定義と選択が必要で、今回の実践は、新藤兼人『一枚のハガキ』のシナリオの輪読やこうの史代『夕凪の街、桜の国』の翻訳といった授業や提出課題を通して「被爆者」の記憶の内面化を目指そうとした試みの延長線上にある。「加害者」の記憶についての実践も課題である(13)。

後者に関しては、「虚構としての演劇」と歴史教育での史料や史実と授業の組み立てという歴史教育論の根本の問題でもある。この点については、映画の場合であるが山田洋次が『母と暮らせば』(脚本・監督山田,2015 年)の演出に際して、70 年前の被爆者の諸相や想いを現代の若い俳優がどのように「想像」して演じるのかにこだわり抜いて制作している (14)。これは歴史学習や歴史認識における「想像」の問題を提起しており、前世の「史実」と現世の「想像・虚構・創造」との関係でもあり、被爆の事実と被爆者への想いをどうとらえて記憶化するかという、歴史とは何かを本質的に問う問題でもある。これらの課題については今後の実践を通して受講生の感想文を手がかりに考察を続けたい。

注

(1) これまでの所論は次のとおりである。

「学生の社会認識・歴史認識の現状と社会科・地歴科教育法の課題」『教育学科紀要』第 2 号（大東文化大学大学院文学研究科教育学専攻),2011 年 3 月。

「満州事変八〇年、アジア太平洋戦争開戦七〇年と日本の戦争認識」『歴史教育・社会科教育年報 2011 年版』,2012 年 3 月。

「教科教育を通しての青年の現代認識・歴史認識の解体と獲得の道筋」『教育学科紀要』第 3 号, 2012 年 3 月。

「「教育方法の実際」の試論―戦後世代の「戦時体験」教育の道筋―(1)」『埼玉の歴史教育』37・38 合併号,2015 年 7 月。

(2) たとえば、2014 年度の駿河台大学の受講生の感想は、「被爆体験の継承と戦争・平和の授業化」という課題を内面から受け止めて深く思索をしたものが見受けられた。

幽霊である竹造は娘のことが心配で現れた存在だが、先に進むことを頑に拒む美津江に対し、そっと背中を押すように「自分の分まで生きてくれ」と繰り返し諭している。この台詞は、作品のテ

ーマでもある伝承をよく言い表わしていると感じた。竹造とその娘である美津江、さらには木下という青年は一本の時間軸上に存在していて、彼らの立っている場所から未来が続いていくのだ。そしてこの台詞は、恐らくその「未来」に生きる読者に向けられたものでもある。「「知らんふり」することはなににもまして罪深い」という言葉に通じていくように、私たちは平和のルーツをたどる義務があるのだ。そのことは、私たちから先の未来を築いていく上で重要な鍵となるだろう。（Aさん）

原爆の恐怖を、戦争の恐怖を忘れてはいけないと人は言う。しかし、若者に知識を与える者の代表である教師でさえ戦争経験者は少ない。さらには今後教師になる人は、戦争の話を経験者から聞いたことがないという人も多いだろう。ならばどうすれば教えられるのかと言う話になる。映像でも良いかもしれない。しかし、今回見せて頂いたような劇は目の前でまるで戦争経験者の当時の事を見ているかのような気を思わせる。他人事の様には感じなくなる。出来るならば全ての児童生徒に劇を見てもらいたい。戦争の悲しさを目と耳だけでなく肌で感じてもらいたいと思った。（Bさん）

（滝澤「「声」の交流：教職科目 公民科教育法と青年の自立(二) 」駿河台大学父母会広報誌『菩提樹』54 号,2015.2.）

(3) 2014 年度の駿河台大学の受講生の春学期レポートには、「戦争での人殺しの心理」、「戦争と教育」、「戦争を題材にした映像作品と写真集について」などのテーマが見られた。詳細は『2014 年度 駿河台大学 職課程　社会科・公民科教育法Ⅰ　レポート集』(2015 年 3 月)に収録した。

(4) 滝澤『戦時体験の記憶文化』、有志舎,2008 年,50 頁。

(5) 成田「『証言』の時代の歴史学」[冨山一郎編『記憶が語りはじめる』]、東京大学出版会,2006 年,30 頁)。

(6) 赤澤「「戦争体験」の記憶」『岩波講座日本歴史　第 15 巻月報 4 』,2014 年, 1～4 頁。

(7) 吉見「アジア太平洋戦争の体験と記憶」『岩波講座日本歴史　第 18 巻月報 17』,2015 年, 5～8 頁。

(8) 山田『兵士たちの戦場―体験と記憶の歴史化―』、岩波書店,2015 年, 「はじめに」1～4 頁。

(9) 今野『歴史学と歴史教育の構図』、東京大学出版会,2008 年, 165～166 頁。今野はつづいて、キリスト者の稀有な抗いの記録である渡部良三『歌集 小さな抵抗 殺戮を拒んだ日本兵』(岩波現代文庫,2011 年)を編んでいる。

(10) 本稿は 2015 年度歴史教育者協議会全国大会での大学分科会報告をもとにしている。ここでは活字化した[ａ]から[ヨ]までの計 40 人の感想文の抜粋については紙数の都合上割愛した。

(11) 須崎幸彦「『忘れてしもうてええんかのう』―舟入高校演劇部の取り組みから―」(『歴史地理教育』838 号、2015.8.)。

(12) 今野日出晴・土屋直人「第 20 分科会 大学」『歴史地理教育』842 号,2015 年 11 月。

(13) こうの史代『夕凪の街、桜の国』の翻訳課題と取り組みについては、『2014 年度 大東文化大学 職課程 教科教育法 地理歴史 レポート集』(2015 年 2 月）に収録した。

(14) NHK BS1 スペシャル「戦争を継ぐ ～山田洋次・84 歳の挑戦～」:「映画『母と暮らせば』“ 戦争を継ぐ” ～山田洋次から嵐・二宮和也へ～」(2015 年 11 月 15 日放映)。

＊滝澤論文の(10)において「計 40 人の感想文の抜粋については紙数の都合上割愛した」とありますが、今回の改訂版では、学生の「感想文の抜粋」を次ページ以降に掲載することができました。

（編集委員記）

「『教育方法の実際』の試論」の補足資料

はじめに

以下は、本号掲載の筆者の論考の補足資料として、学生の感想を記録化した。被爆体験を語らずに亡くなった祖父に言及しているものなど、貴重な記録であると考えられる。

◆大東文化大　地理歴史　実受講生 14、感想 13

・この世にいない父親だが美津江を支え、声をかけ続けるところに自分は感動した。子どもたちへの読み聞かせの場面で…竹造が原爆のことをお話の中に取り入れて話すことを美津江に勧めていた。美津江は…嫌がっていた。…自分は戦争を知らない世代の人間であるが、それでも少なからず小・中・高の先生たち、父・母・祖父・祖母、そして今回と戦争について教えていただいた。これをしっかりと受けとめ、今度は自分から発信していかないといけないと思った。（ａさん）

・私は、1994 年生まれで、戦争というものを経験したことがないのでよくわかりません。しかし、今回劇を聞いて[聴いて]、とても心に響きました。小学校や中学校などで、戦争を体験された方々の講演などを聞いた多くは…どれだけ悲惨…残酷…多くの人間が死んだか、悲しんだかなど、被害的なことを全面的に話されているものがとても多かった。…今回は…生き残った人の気持ちや、その未来についての内容だったので、とても印象に残りました。以前、授業のリアクションペーパーにも書きましたが、「戦争や原爆の悲惨な経験や体験を、戦争をしらない多くの人びとに語り継がれるべきだ」ということは…本当は思い出したくない記憶であるはずなので、同じあやまちをきり返してはいけないと思いましいた。（ｂさん）

・映像だけで生徒に戦時というものはどういうものであったかを伝えることは簡単ではあるが、生身の私達の声で伝えることが今の教師としての質を上げることができるのだと考えました。（ｃさん）

・途中原爆が起きた時、その後の時が出た時に、私は以前広島に行って平和資料館に行ったことがあり、そこで見た原爆の写真や被爆者の写真を思い出されて、とても苦しい気持ちになりました。（ｄさん）

◆駿河台大　公民科教育法Ⅰ　実受講生 25、感想 17

・原子爆弾の投下はしょうがないことであったと言われることがある。今回の演劇を見て[観て]、そうした考えについて疑問を投げかけているものであるように感じた。…原子爆弾は多くの人を殺しただけでなく、生きている人に深い傷を負わせたのだと感じた。（ｅさん）

・冒頭で語った「日本はアジア諸国に対して加害者であったが、世界で唯一の原爆被害者である」という言葉にハッとさせられた。確かに日本はアジアの国々に対し占領・虐殺を行った。それに対する償いは必ずしなければならない。アメリカに対してもそうだ。多くの日本人が殺された。だが多くのアメリカ人も殺したのだ。…あの大戦で日本は何を得たのか？ 何もかも失った…だが一つだけ得たものがあると思う。平和への想いだ。あの悲劇を、悲劇を二度と繰り返さないという想い。その想いは受け継いでいかなければいけない。口伝で、または学校の授業で、そして今回の様な劇で。（ｆさん）

・原爆が広島に落とされた日、そこに住む人々は何らいつもと変わらない生活を送っていた。そこに原爆が一つ落とされたことで何もかもが焼けて消えた。一瞬にして日常生活は蒸発し、生

き残った人々には生涯残る原爆の焼き印が押された。それは身体ではなく、心に押されたのであり、あのとき自分がこうしていれば、という自責の念を背負って生きていくことになったのだと思う…原爆を体験した日本人だからこそ、世界にその非人道性を訴えていく必要があると思った。（ｇさん）

・演じる方もほとんどが非戦争体験者であると思いますが、実際に体験したかのように語ったり演じるための役作りに一生懸命励んでいることが、演技を見ていれば一目瞭然で…実際の戦争の映像を見るのとは違って、演じる人たちのお芝居を見る［観る］のはまた違う視点から戦争のことを学べる（その時の空気感やしゃべり方などで）。今回は「戦争」がテーマの演劇だったが、他にも公害問題のことや今の日本で起きている問題に焦点をあてた演劇を見て［観て］みたいと思いました。（ｈさん）

・自分は、戦争に全く関わったことのない平和な時代に生れて、幸せであると考えるとともに、戦争について知っていることが少なく、当時のことがよくわかりません…劇の中でもあるように、伝えて行く時に、話をいじってはいけないと言っていたことは大切であることだと思いました。戦後から 70 年経過した今、当時の戦争体験者による話を聞く機会が減っていると思います。戦争を繰り返さないためにも、過去に目を向けて理解していくことは大切であり、正確に伝えるということは教師にとっての役目であるのだと考えました。（ｉさん）

・もう過ぎてしまった事ですが、昔の人々が判断した行為には色々な考え方があると思います。アメリカはどれほどの威力かを試すためとあります。なぜアメリカは東京など都市に落とさなかったのか…日本が終わってしまうからではないかと思います。昔と今は考え方が違うと思います。決して原爆を投下したことが正しかった行為だとは思っていませんが、いつまでも続く戦争を終わらせたかったのではないかと思いました。…結果的に原爆を投下したということから、２度とこのような行為を繰り返してはいけないと学びました。（ｊさん）

・自分がそもそも広島の出身なので、作品に関してはあまり難しい印象を持たずに聞く［聴く］ことが出来た。…娘と自分に圧倒的に違うものがあり、それは生きていることへの罪悪感である…色々なものが彼女を後半に向けて苦しめてくる。しかしそれを厳しくもやさしく説教してくれる父の存在がこの作品の最大のポイントになるのではないだろうか。原爆は命を奪うだけではなく、生き残った者たちの運命とか考え方まで変えてしまった。それがよく分かる作品だった。自分だったら生き残ったら全力で幸せを目指すに違いない。（ｋさん）

◆駿河台大　教職論・教師論　実受講生 55、感想 37

・私は以前の感想で書いたのですが広島の平和記念館に足を運んだことがあります。だからその時の状況の知識は多少あったのですが、演技を見て［観て］あの原爆を受けて生き残った方がいらっしゃった事は初めて知りました。生き残った事を嬉しく思えないのも何となく分かりました…原爆についてはＴＶドラマや映画だったり資料でよく目にしてきましたが、それはあくまで原爆についてであって、受けた人の人生はあまり目にしなかったので、今回の様な朗読演技という貴重な機会があって良かったです。（ｌさん）

・役者さんの表情一つ一つまで真近で感じることができた。声や表情からも迫力が伝わってきた…本や映画などで見るよりも断然感情がストレートに伝わってきた…当時の周りの様子が頭に浮かんでくるようだった…当時の人たちの会話を目の前で聞いているようだった…自分が教師になって、生徒に何か劇を見せる［観せる］こともあると聞いたので、今日のような心に響く作品を見せることができると良いと思った。自分自身、そういった作品を選ぶことができる

ように積極的に見に[観に]行きたいと思った。（ｍさん）

・生きていることすらも罪深いと感じさせてしまうなんて残酷すぎます。でも戦争をしていた時代、こんな風に考えていた人はきっとたくさんいたのではないかと考えます。それを思うと今、自分達がこうして普通の生活を送り、平和に家族と過ごせていることがどれだけ幸せなことであるかを改めて知り、確認することが出来ました…この平和な日本を築き上げるために犠牲になった方々、また尽くされた方々に敬意を持たなければいけないと思いました。（ｎさん）

・竹造が三津江[美津江]に幸せになってほしい思いで色々とおせっかいをやいているのを見てあたたかさを感じた。ほっこりした。竹造が三津江を説得していくうちに、三津江は伝えるために生かされている、という考えに行き着いて、この原爆が投下されたという出来事は、日本人なら、忘れてはならないことだし、日本人だけならず、世界中の人が知っておかなければならないことだと思うので、こうやって伝える人がいるということはとても重要だと思う。（ｏさん）

・物語のテーマは主人公美津江が大切な人たちの死のトラウマを乗り越えるというものだと感じました。…一番印象に残っている言葉が…「あのとき広島では死ぬのが自然で、生き残るのが不自然なこと」と言った親の一文です。僕は最初あまりに驚きすぎて一瞬逆なのでは？ と思ってしまいました。でもよく考えると、その当時の広島は、それほど悲惨な状態だったんだと思いました…2011 年にも東日本大震災で多くの人が亡くなったが、それらの事も決して忘れてはいけないなと改めて強く心に決めました。（ｐさん）

・座りながらの朗読劇だったが、場面に合わせてしっかりと表情が変わっており、可能な範囲で動きが加えられているのでまさに美津江と竹造を見ているかのようだった。この『父と暮らせば』という作品は…互いに竹造の死を自覚していながら生前と同様に話している。これは原爆被災者の人達が持つ独自の罪悪感などを和らげる為、幸せに生き続けることを後押しする為の死者から残された者への励ましの言葉・想いのようなものだろうか。いずれにせよ『ガラスの破片が人間の身体を針ネズミのようにした』といった生々しい表現から原爆の恐ろしさ、悲惨さ、無残さなどが伝わってくるような、胸が絞めつけられるような物語だった。（ｑさん）

・今日本では、戦争をまたしようとしている。日本はまた同じ誤ち[過ち]を繰り返してしまうのではないかと考える。これは本当に良くないと思う。全く関係の無い人達が死んでいって、戦争を始めた人達が生き残る。こんなことがあって本当に良いのかと考えさせられた。（ｒさん）

・朗読劇のすごいところは、目の見えない方でも楽しめるところだと思いました。…私はこの話を高校のとき読んだことがあります。一人一人解釈は違うと思いました…授業で本を読みましたが、朗読劇はまた違った雰囲気でした。…私たちが後の世代に伝えて行くことが必要だと思いました。（ｓさん）

・私は、授業中に感動し、初めて泣いた。戦争の悲惨さ、親や友達など大事な人が亡くなったときの悲しみ、そしてあの地獄のような出来事。これらを公演といった形で考えさせられ、日本にとってあってはならない非平和的な出来事がもう二度と、三度も四度も起こしてはいけないということ。戦争の事を少しでも考えていなかった自分自身が、戦争規定である憲法９条の改正をどうでもいいと見ていたこと、とてもはずかしくなり、しっかりと考えなければならないことを改めて考えさせられました。（ｔさん）

・人が生存するという極限の欲望が強くなった時、被爆地、広島・長崎は地獄を超越し言葉すら見つからない場所となってしまったのだと感じました。安倍晋三氏はこの劇を観た事がある

のでしょうか。観ても尚、戦いとう選択をするのでしょうか。悲しい事です。…舞台に画面は無い…生で伝わってくる…今回の舞台は伝えてゆく使命という、伝えるという新たな演劇の役割を胸に刻むことができて良かったです。（ｕさん）

・私が住んでいる沖縄でも戦争の被害を多く受けました。沖縄は地上戦が行われ、多くの戦争の関わりのない人々が射殺されたのです。また、「つかまって、捕虜になるぐらいなら死んだ方が、まし」というような考えがあり、防空壕の中で集団自決をして多くの尊い命がこの地を去ってしまった。…今私たちが生きているのは、どんな状況でも命を大切に思い自決という道を選ばずにあの戦争から、生き延びてくれたおかげだと思いこの一つしかない命を一生懸命に生きていきたいと思いました。沖縄には、米軍基地が在日米軍基地の 75%が集中しています。今そのことで問題になっていますが、本土に住む人々はあんまり興味がないと思います。また、基地の移設の話もほとんど知らないと思います。自分達には関係ないと考えているなら改めて基地について知ってほしいです。憲法九条についても、もっと考え改正を見直してほしいです。この平和な日本に戦争はいらないと思います。（ｖさん）

・耳で聞[聴]いているのではなく、感覚的に自分の心に話しかけられているような気がしました。一言一言を聞くたびに体に緊張感が走り、その話されている場面に自分が特別参加していた気がします。効果音もあったので、想像をもっとしやすくなりました。
（ｗさん）

・「父と暮らせば」を読み改めて原爆の悲惨さを感じたように思います。今現在、戦争もしておらず、昔と比べると幸せに、平和に生きている私達が「感じた」といってもそれは本当に小さなものにしか過ぎないのだろうとも思います。原爆を体験したことのない私たちには、当時の人達の気持ちは計り知れないと思うからです。それでも少しでも感じることができたのは、現在の日本でまたいつ戦争が起こるか分からないからです。今の日本は少しずつまた戦争への道に戻っていっているような気がして、ニュースなどを見ている時に、緊張することがあります…もっと危機感を持って自分たちの意見を声に出して言うべきなのかもしれません。…今の私たちにできることは、二度と同じことが起こらないようにすることだと思います。（ｘさん）［参観せず、読書後の感想］

・私は、広島出身で、私の祖父は被爆者だ。爆心地からは少し距離があり助かった。小学生の時、毎年夏休みに平和学習として原爆についての宿題が出された。低学年の時は、あまり重大さが理解できなかったが、高学年になるにつれて理解し始め、とても恐ろしいことだったということが分かった。このように、私たちはまだ、戦争の経験者に実際に話を聞くことができた。しかし、私達が教師になった時にはもう戦争の経験者はいない。そのときにどう伝えていくのか…経験者ではない私たちでは説得力に欠ける。実際に経験した話ではなく、経験者から聞いた話を教えていかなければならない。…戦前のように戻らないようにするためには、憲法９条の改正を絶対に許してはいけないことだ…もう二度と戦争をしない世界を作っていくことが、私たちの役目かもしれない。教師だろうと将来何になろうとも、できることはあると思う。
（ｙさん）［参観せず、期末レポート「私の教職論・教師論」］

◆早稲田大　社会科教育法　実受講生 35、感想 24

・「父と暮らせば」原作を知らなかったので、そのことについて調べてから鑑賞した。…演技(舞台)を見て[観て]思った。ありのままを映したものを見ることでしか得られない価値が存在すると、目の前にあるものを自分の目で捉えることで得られるものがある、と。この方法でしか

「伝える」ことができないものを受け取ることができた。このことは大学生活の中で得られた最大の価値なのかもしれない。（イさん）

・『父と暮らせば』の演劇を教室で見［観］させて頂き、涙が止まらなかった…被害の現実という言葉だけでは表現することができない、当時の人々の苦しみ、そしてそれでも前に進もうともがく心の葛藤を強く感じた。…私はこの場面を見て、ある新聞記事を思い出した。それは、東日本大震災の今年の追悼式の宮城代表の言葉の記事だった。そこには私と同じ年［歳］である 19 才の学生の壮絶な体験が書かれていた。朝日新聞 2015 年３月 12 日朝刊１頁「祈る、大好きな人へ 動けぬ母に最後の言葉 東日本大震災４年」である。…幽霊として出てきた竹造の言葉「わしの分まで生きてちょんだい」が追悼式の言葉と重なり、思わず涙が出てしまった。今回の劇は、広島の原爆についてはもちろん、「生きること」について考え直すきっかけとなった。（ロさん）

・『ありがとありました』に関しても…おとったんからヒロインへと使用者が移行し…幸せになってほしいという願いが、最終的にヒロインにしっかり伝わり、それを受け取ったヒロインが最後、彼にこの言葉を告げたとき、それと同時に起こった２人の別れが、より一層、切なさを感じさせました…私はヒロインがおとったんを通じて、自分と原爆に向き合う際の心の変化を、今回の作品のテーマであると思います。（ハさん）

・これまではこういった類の作品に対して、悲しいという感情、辛いという感情が優先していました。今回も…抱かなかった訳ではないですが、それ以上に“感謝”の気持ちを抱きました。…私は先日、靖国神社に参拝し、遊就館を見学し、現代に生きる人が、太平洋戦争で亡くなった家族に書いた手紙を読みました…彼らも亡くしてしまった人を切に思っていました。…私は、自分が様々な人のお蔭で生きていると思っています。20 年も生きていない自分ですが…「ここでは泣けないな」と思い涙は流しませんでしたが、感極まったのは事実です。…この劇を観てそういうことを感じられた、それだけでも、この授業を取って良かったと思います。先生には申し訳ないですが、ありがとうございました。（ニさん）

・私の祖父は被爆者です。当時広島の呉の海軍基地に祖父はいました。８月６日に、広島市内で直接被爆したわけではありません。しかし、軍の命令で、その後すぐに放射能が蔓延する被爆地に入り、救護や瓦礫の撤去活動にあたったそうです。その後広島に留まった祖父は、広島大学に復学し、教育を学んだ後、旭川の教育大学で教鞭をとりました。しかし、私は祖父の原爆の話をほとんど知りません。１つには、祖父は私が生まれる１年前に若くして心臓の病気で亡くなってしまったことがあります。でも、父も母も、祖父と原爆の話を知りません。祖父と結婚した祖母もほとんど知りません。祖父と仲の良かった友人や、教え子達もほとんど知りません。祖父は被爆者手帳をもらえたらしかったのですが、受け取りませんでした。そして、家族にも、友人にも、教え子にも決して当時のことは話さないまま、私の生まれる１年前に亡くなりました。私が祖父が被爆直後の広島にいたと知ったのは、つい２年前のことでした。

　その祖父のことを考えながら、劇を観ていました。「忘れようとした」というセリフに考えさせられました。祖父は忘れたかったのだろうか。誰にも話さず記憶の奥底で忘れようとしたのだろうか。それとも、被爆直後の惨状を見た祖父は、直接被爆しなかった自分自身が話をすることが憚られたのか。最後の場面で主人公はそれまで隠していた感情を爆発させ、過去と向き合い今と未来と向き合うことが出来た。語らないまま死んだ祖父は、果たして過去と、今と未来と向き合うことが出来たのか。原爆を知らない、戦争を知らない、まして祖父の半分も生

きていない私では、想像が、理解が及ばないことなのかもしれない。考えても、考えても分からないことが分からなすぎて、憂鬱な気分になりました。考えはまとまりません。それでも、今後、教員を目指すものとして、キレイごとではあるけれども、思うことは、語らないことにも意味があること。戦争を、原爆を知る世代が次々と亡くなる今、当事者の話の価値は測りしれない。それは、前提として語らずに死んだ人の存在も認めなければならないし、忘れてはならない。「何故語らなかったのか」。同じ視線にはなってしまうが、同じ視線での問いかけを生徒にし、共に考えることが、実は共感をはらんだ戦争の理解につながるのかもしれない。私はそう信じたいです。（ホさん）

・「父と暮らして」の朗読劇の中で、私は、娘が父に何故、恋人を作ろうとしないのか、と問いつめられたときのシーンが、最も心に残りました。「～してはいけんのです」と、繰り返し、自分の恋心と、罪悪感にはさまれて苦悩する姿に、私は高校のときに受けた平和学習を思い出しました…母校では、中学３年生から高校３年生までが一堂にあつまって、映画や公演を通じて平和について考えるための時間が年に一度設けられていました。あつかう内容は様々で、『アンネ・フランクの日記』を題材にしたり、世界に点在するアメリカ軍基地について学んだり、というかんじでした。ある年私たちは『夕凪の街 桜の国』という映画を観ました。戦争終結直後と現代という２つの舞台で、被爆した方の苦悩をそれぞれ描いていました。私の記憶では、終戦直後の舞台では、一人の女性が、結婚してもよいか、子を産んでもよいか、子を産んだらその子や孫たちを苦しめることになるのではないか、とおびえ、悩みつつも伴侶と支えあっていく姿が、現代の方では、その孫たちが、被爆者のレッテルに向き合い、そして、祖母と同じように悩む、というような姿が描かれていたと思います…私は、被爆の苦しみは一代ではおわらない、というところに一番衝撃を受けました。

今回の朗読劇の娘にも同じ苦しみがありました。自分は被爆者で、その影響は子にも継がれるらしいから、子をつくるわけにはいけんのです、というような台詞がありました。これは、本当の理由を隠すための言い訳だったのかもしれませんが、そういった考えは、少なからず、彼女の中にあったのだろうと思います…よく考えると、そこには、うまれてもいないけれど、我が子を守ろうとする母の姿がみえるような気がして…親としての気概に心打たれました。また、その気持ちは、父親が実際に娘を守るために自分の命を捨てたというエピソードがあると理解した時、より強くなりました。（中略）

…人はよくもわるくも忘れる生きものだと、私は思います。友人の死などは、時間がたつにつれて、その悲しみがうすれていって、ようやく乗り越え、前向きになれるものだと思います。原爆投下から３年たった時点でも。彼女はまったく忘れることが出来ずに苦しんでいました。それほどまでに、原爆は心に深い傷を残す出来事だったのだ、というメッセージが込められているのだと、思いました。…どのようななぐさめ方が良いのかわからないのですが、その傷に触れないでおいてあげるのも一つ、だと思いますが、彼はあえて触れることで、語ってもらうことで、その痛みを共有し、より添うという方法で慰めようとしたのではないかと思いました。（へさん）

・今回の演劇を観て、演劇のすばらしさを体験した。人が演じるということは、こんなにも迫力があって、心に響くものだとは思わなかった。実際に原作を読んでからもう一度観たいと思った。本当に良い体験ができたので、この体験を生徒たちにも味あわせてあげたい。（トさん）

・私は演劇が好きで，よく見[観]に行くのですが、井上ひさしさんの“父と暮らせば”は今回が

初めてでした。20 年も前の作品にも関わらず、古さを感じさせない劇で、セリフ回しや展開の仕方が流石だなと思います。日常的な会話から物事の核心に触れるという手法は、日常の中の些細な言動の中に、心の傷・闇がひそんでいるという事を感じさせました。また、最後に娘がたたみかけるように自分の罪をざんげし、父親の許しを得るシーンでは、娘が心の奥底にしまいこんでいたトラウマをさらけだすことで、心が浄化されていくというのが上手く描かれていて、見ていて涙が出そうになりました。

戦争を体験した事がないにも関わらず、娘役の人にとても感情移入ができて、戦争の恐さや人々の心に残す悲しみを切に感じました。また機会があれば、井上ひさしさんの別の舞台や、別役実さんの“象”など、戦争・原爆をテーマにした舞台を見に行きたいと思いました。（チさん）

→［最終講義後の感想文］

前回の授業の後で、先生に“父と暮らせば”の感想について物足らないと言われ、正直ショックであった。個人的には結構ひねりだした方だと思っていたからだ。

今日他の人の感想を読んでみて、「なるほどこういうことを書いているのか」と驚いた。私は演劇と教育を結びつけるという考えがなかった。だから、「演劇から学んだことや、その演劇が伝えたい事が何なのか」という事よりも、この演劇はどうして面白いのか？ という事にばかり目が行っていたのだと思う。

そして個人的には“父と暮らせば”はあまりにも直接的すぎて、演劇として面白さを感じられなかった。だから感想を書けなかった。演者の方には申し訳ない。私がもし演劇を授業に生かすなら、別役実や野田秀樹の舞台から、ちょっと違う角度で戦争や平和について考えさせたい。（チさん）

・「広島・長崎での被爆者は、核の存在から逃れることができない 20 世紀の人類を代表して地獄の炎で焼かれたのだ…」この言葉がとても印象深く胸に残っています。…今の私達も同じだと思います。その点で、社会科の授業において原爆のことを取り上げることには大きな意味を感じます。

しかし、私は以前からずっと「当事者でもない自分が原爆の恐ろしさを語り、未来世代に継承していくことに意味はあるのか」と考えています。歴史はあくまで“事実”であって、その“事実”から何を考え、何を伝えるかには必ず語り手の主観や実際の体験が反映されます。逆に言えば、私が原爆の恐ろしさを資料から感じ取った上で生徒たちに語りうる歴史において、生徒一人一人が私と同じような想いを抱くかと言うと疑問が残ると思います。しばしば実物教材を用いて戦争の悲惨さを伝える、という授業例がありますが、その教材を見て、生徒が本当に教訓としての“反戦のメッセージ”を受け取ってくれるのか―面白半分で好奇の目を向けてしまう生徒もいるのではないか―と考えてしまいます。写真や文章から浮き上がってくるメッセージを「どう伝えるか」に全てがかかっているのでしょうか。

その点で、今回の演劇の授業は、私にとって本当に心に残るものとなり強い感動を覚えましたが、誰しもがそうだとは限らないでしょう。あまり心に残らなかった、と考える人もいると思います。だからこそ、歴史や地理、公民に興味のない生徒が、私の授業の内、一つでも記憶に残り思い出してくれるような授業を一つでも多く行えるようになりたいなと思いました。（リさん）

・語り手が広島出身者と社会教育[→障がい児教育]に携っていた、という点も重要だろう。広島

とは無縁で、歴史にも興味が無い人が「父と暮らせば」をやっても心には響かなかったろうし、そもそもあれほどの語りを出来なかったと思う。自分が教鞭を執るとき、ぜひ生徒に似たような機会を設けて挙げたいと思う。

また、内容も考えさせるものであった。私は社会科、特に歴史の教師を目指している。事実を様々な面から見せ、生徒に伝えるのが仕事である。「歴史を後世に伝えるべきだ」と思っていた。しかし、ヒロシマの当事者で、思い出したくない事実として、後世に伝えることを拒む人々もいた。実際、原爆ドームを残すか否かでも相当な論争が起きたらしい。ここで感じたのは、第三者として歴史教育をしようとする教育者と、その事件の当時者の思いが必ずしも一致するとは限らないということだ。「歴史を伝えることは、正しいことである」と思いこんできていたが、実際はそうではないのかもしれない。半端な教育は差別を助長し得ると以前学んだ。そして、今回、第三者であり、どうしても浅薄になってしまう現代の教育者による歴史教育は当事者かそれにつながる人々を傷つけることになるかもしれないことを学んだ。歴史教育は、やはり扱いに難しく、しかし、大切なものである。（ヌさん）

・私たち、戦争を経験していない世代は戦争のことを知りません。また祖父母でさえ戦争を知らない家庭もあるのではないでしょうか。幸い私の祖母は戦争経験［者］であったため、小さい頃から当時の話を聞く機会がありました。しかし、被爆者ではないため原爆のことを詳しく聞くことはできずにいました。祖母の話の中でもかなり生々しい話はありましたが、今回の話ほどではありません。私たち若い世代は戦争をもっと知るべきだと考えます。知らなければ後世に伝えることはできません。伝えることができないと戦争の記憶はやがて消えます。そんなことは必ず阻止すべきです。過去の過ちをまた繰り返すさない為にも、私たち若い世代が戦争を知り、後世に伝えることが私たちの使命だな、そう改めて感じることができた演劇でした。（ルさん）

・もっとも衝撃を与えられたものは美津江がおとったんとのやりとりの中で言った、「(原爆のことを)早く忘れたいんです」というニュアンスのセリフだった。私は前回の課題の中で、「人間はどんなに悲惨な事柄であっても忘れる生き物だから、忘れないように歴史を学ぶのだ」という考えを書き記した。この考えはあながち間違ってはいないと思っているが、決定的に「悲惨な経験をした人々」の視点が抜け落ちている。観劇をすることで、自分の至らないところ・欠けているところに気づかせてもらった。（中略）

…歴史は、後世へと伝えることができなければ消えていく。だが、それを語るということは、特に原爆のような出来事を経験した人々にとっては、並大抵ではない苦痛を伴う可能性が高いことなのだ。…当事者ではない私達の視点に加え、当事者の中でも様々な視点が存在すること。このことを示し、学生と一緒に考えていくことが大事だ。（ヲさん）

・伝える手段の多様性を考えさせられました。もちろん、原爆についての事項は知っていたし、分かっていたつもりです。しかし、知識獲得手段としては歴史の授業や教科書が中心で、あとは「はだしのゲン」で読んだ程度でした。しかし、今回の演劇では実体験ではないにしろ人間の感情が込められた伝達手段が用いられたので心の中にすっと入ってきたような気がしました。教科書や授業の中では事実説明とその悲惨さを伝え、「この悲惨な出来事を繰り返さない」ということで無機質に語り、投げかけることで、子どもたちはただ「いけないことなんだ」と教え込まれ、自らの危機意識や感情で問題を捉えないのではないでしょうか。…原爆問題だけでなく、他のテーマでも当時の人が感じ、どう暮らしたのか、史実に基づくだけでなく、子ど

もの心に入るように伝えていく方法を考えていきたいです。（ワさん）

・演劇が終わった時、言葉では説明できないような気持ちになった。生き残ったことに対して罪悪感を抱き、父親を見殺しにしたと後悔する。おそらく原爆や空襲で生き残った人々は皆、このような気持ちで戦後を生きていたのではないか。戦後、普通の生活に自分だけ戻っていいのか、死んだ人々はどうなってしまうのか。生き残った人々の複雑な心境が表現されていた。…「父と暮らせば」では父が出て来て、娘を励ましたが、実際に戦争で大切な人を永遠に失った人々はどうやって普通の生活に戻ったのだろうか…と思った。戦争は 1945 年の 8 月 15 日に確かに終わったけれども、終わったのは戦争であって、人々の心に残った跡がその後もずっとずっと残っていると思うと、一体何のために原爆を使ったのだろう、と疑問に思った。自分の父親がどのように死んだのか、地蔵の溶けた顔を見るまで忘れていたシーンは非常に印象的だった。あまりにもショックだったために、心の奥に無意識のうちに押し込めていたと考えると、本当に想像を絶するような状況だったことがうかがえる。私は戦争を経験していないからこそ、こうした戦争の状況が分かるものを忘れずに何度も自分たちに問いただすことが必要だと思う。辛く、記憶から消した記憶を経験者が残している意味というのを私達は理解しなければならないと強く思った。（カさん）

・「戦争」を行うのは地球上の生物では人間だけで、犬や猫が戦争したという話は聞いたことがない、という話を私が 6 年生のときの担任の先生はおっしゃっていました。…しかし、私が思うのは、戦争をやるのは人間だけれど、戦争をやめさせることができるのも人間しかいない、ということです。この本の美津江のように戦争の恐ろしさを身を以って体験した人が日本からいなくなる日が近い将来訪れます。さらに、今の日本政府を見ていると近い将来、日本が戦争に参加する日が来るのではないかと思います。だからこそ、今、この瞬間から、私達は何が出来るか、教員になったとすれば、教師として生徒に何を伝えるのかを真剣に考えなくてはならないと思います。（ヨさん）［参観せず、読書］